

知っておきたい！解熱鎮痛薬のキホン

急な発熱や痛みはつらいものです。これから始まる大型連休などでも頼りになるのが解熱鎮痛薬です。解熱鎮痛薬は、熱を下げたり、痛みを和らげたりすることができる最も身近な薬のひとつです。市販のものも数多くの種類が販売されていますが、正しく理解して使うことが大切です。今回は、解熱鎮痛薬の基本的な知識についてご紹介します。



解熱鎮痛薬ってどんな薬？

解熱鎮痛薬は、主に解熱作用（体温を下げる作用）、鎮痛作用（痛みを和らげる作用）の2つの作用を持つ薬の総称です。風邪による発熱や頭痛、生理痛、筋肉痛など、様々な症状の緩和に用いられます。痛みや発熱などを起こすプロスタグランジンという物質の生成を抑制します。「かぜ薬」の主成分ではありませんが、咳やたんを抑えたり、鼻水を止めたりするような働きはありません。かぜ薬（解熱剤）として用いられるほか、頭痛・生理痛を緩和させる薬、痛み止め薬や湿布薬などにも用いられます。

解熱鎮痛薬の主な成分と特徴

（1）アセトアミノフェン

詳しい作用機序は未だに解明されていないが、脳の体温調節中枢や中枢神経などに働きかけて熱を下げたり、痛みの伝わりを抑えたりすると考えられています。NSAIDsに比べて、胃への負担が少ないなど副作用が少なく、小児にも使用可能であるため、解熱鎮痛の第一選択薬となっています。

【主な副作用：アナフィラキシー、吐き気、腹痛、肝機能障害など】

（2）非ステロイド性抗炎症薬（NSAIDs）^{エヌセイス}

NSAIDsの主な作用機序は、シクロオキシゲナーゼ（COX）という酵素の働きを阻害することです。COXは、炎症や痛みの原因となるプロスタグランジンの合成に関わっています。NSAIDsがCOXの働きを抑えることで、プロスタグランジンの産生が減少し、炎症が鎮まり、痛みが和らぎ、熱が下がる効果が得られます。また、NSAIDsは、アセトアミノフェンに比べて抗炎症作用を持つ点が大きな特徴です。そのため、炎症を伴う痛み（関節炎、筋肉痛、打撲など）に対してより効果を発揮することがあります。

【主な副作用：消化性潰瘍、腎障害、アスピリン喘息など】



解熱鎮痛薬を使う前に確認したいこと

製品に記載されている用法・用量を必ず守りましょう。自己判断で増量したり、服用間隔を短くしたりすると、副作用のリスクが高まります。また、漫然とした使用は避けましょう。加えて、普段服用している薬がある場合、飲み合わせによっては、効果が弱まったり、副作用が強くなり出たりする可能性があります。そして、妊娠中・授乳中の方、特定の病気をお持ちの方、小児・高齢者、過去に特定の成分でアレルギー症状が出たことがある方など、使用に注意が必要な場合があります。該当する方で、解熱鎮痛薬の服用をお考えの際は、必ず医師や薬剤師に事前に相談しましょう。

おわりに

解熱鎮痛薬は、適切に使用すれば、つらい症状を和らげてくれる頼りになる薬です。しかし、使い方を間違えると、思わぬ副作用を引き起こす可能性もあります。また、解熱に関しても鎮痛に関しても病気の根源に作用する薬ではありません。体調に不安を感じたら、我慢せずに医療機関を受診しましょう。また、薬剤師に相談してみることも大切です。解熱鎮痛薬について正しい知識を持ち、安全に活用してください。



【参考】こんな解熱鎮痛薬があります

アセトアミノフェン（カロナール、アンヒバ、小児用バファリンCⅡ など）

熱を下げたり、痛みを和らげたりする作用はあるが、炎症を抑える作用はほとんどない。総合感冒薬（いわゆる風邪薬）や、子供用の解熱鎮痛薬（粉薬、座薬等）など、多くのかぜ薬にアセトアミノフェンが配合されている。

アセチルサリチル酸（アスピリン、バファリンA など）

NSAIDs のひとつで、120年以上前からある解熱鎮痛薬。ドイツ・バイエル社が開発し、多くの国で販売されている。ヤナギの樹皮に含まれる成分から合成して作られる。発熱や痛みを伴う様々な疾患に用いられるが、妊婦や小児への使用は禁忌であり、特に小児への使用は重篤な副作用を起こすとして報告されている。

イブプロフェン（イブ、バファリンルナ、エルペイン など）

比較的效果が高いとされ、アセトアミノフェンに次いで広く使用されている。消炎、鎮痛、解熱作用を比較的バランスよくもっているだけでなく、アスピリンと比べて、副作用が少なく安全性に優れているため、小児にも使用されることがある。【主な副作用：消化性潰瘍、腎障害、アスピリン喘息など】

ロキソプロフェン（ロキソニン、ユニペイン など）

比較的に速く効果が現れ、痛み止めとしての効果が高いとされている。胃への負担を軽減するため、食後または何か軽いものを口にしてから服用することが推奨される。また、他の薬との併用は、副作用のリスクを高める可能性があるため注意が必要。【主な副作用：胃部不快感、腹痛、吐き気、食欲不振、発疹など】